

イラン・テヘランの古書店

―ある歴史家の視点から―

小澤 一郎

●はじめに

イランはごく最近も核協議の妥結やサウジアラビアとの対立などで日本人の注目を集めているが、これまで日本人の入国が必ずしも容易でなかったこともあって、イランに対する印象はまだまだ報道に形作られたイメージ先行で、その内実は基本的な事柄についてすらほとんど知られていないといつてよいであろう。本稿で紹介するのはそんなイランの古書店の様子であるが、そんな情報「知っている方がおかしい」というのが一般的な認識ではないだろうか。しかし、その内容からは日本との相違点のみならず、意外な共通点もみえてくるはずである。

ただ、筆者は近代イランを専門とする歴史学者であり、イランの古書店を学術的に調査したわけではない。そのため、以下の記述で

は二〇〇九年から二〇一一年のイラン滞在の際に最もよく利用したテヘランの古書店を対象を絞り、客として古書店を利用した人間としての観察と、研究者としての自身の古書店との「付き合い」の経験に基づき、様々な側面を素描するという形を取る。

●テヘランの書店街

テヘランの書店街は、同市を東西に貫くエンゲラーブ(革命)通り沿いにある。より正確には、テヘラン市域の中央よりやや北西寄り、エンゲラーブ通りの始点となるエンゲラーブ交差点周辺と、そこから東側に延び、テヘラン大学中央キャンパスの南辺を形成するエンゲラーブ通り沿い、およびそこから南北に伸びる数本の通りに書籍を扱う店舗が集中している。イラン暦一三八七年(西暦二〇〇八)

〇九年)の『イラン出版業案内』に登録されている全国の書店三〇〇〇店あまりのうち、テヘラン市にはその約二二%にあたる七〇〇店弱が存在しているが、筆者が手作業で数え上げただけでもそのうち約二五〇店(約三六%)がこの区域に集中しており、まさにイラン国内随一の書店街といえるであろう。

この書店街は古書店のみならず、日本人研究者にもなじみの深い「タフリー」や「ハーラズミー」といった新刊書を扱う書店や、テヘラン大学出版局、「アミール・キャビール」「ミラーセ・ファルハンギー」など販売部門を擁する出版社などさまざまな形態の店舗を含んでおり、古書店のみが集まっていわゆる「古書店街」を形成しているわけではない。大学前という場所柄もあって教科書を扱う書店も多く立ち並ぶ。

書店街の位置するエンゲラーブ通り周辺には映画館も複数存在し、また書店に混じって点在するCD、DVD、VCDやTVゲーム、パソコンソフトなどの販売店を通して、書籍のみならず様々なメディアの商品が流通する。まさに文化的中心地と呼ぶべき空間を形成しているといえるであろう。

この一帯はテヘラン大学を中心としたいわゆる「学生街」となっており、道行く人々の平均年齢は低い。筆者の滞在中には欧米式のカフェ(テヘランではまだ少数である)も開店し始めていた。ただ、テヘランでもより北に位置するヴァナクやタジュリッシュといった地区に比べれば、洗練度はまだまだといったところ。このあたり、東京における神田・神保町周辺の位置づけに通ずるものがある。

●古書店の概要

それぞれの古書店の様態は千差万別であり、それを要約することはなかなか難しいが、最大公約数的に記述するとすれば以下のとおりとなろう。エンゲラーブ通り周辺の書店街の場合、古書店は店主個人のみ、もしくは多くても数名程度の従業員によって運営されて



エンゲラプ通りの一角。1階部分に書店が立ち並ぶ

いる。このあたりは日本の多くの古書店とあまり変わらない。ただ、テヘランの場合多くの古書店は独立した店舗を持たず、ペルシア語でバサージュやバーザールチェと呼ばれる集合店舗の中に入居している。こうした集合店舗は、筆者がテヘラン滞在中に直接訪れたものに限ってもエンゲラプ通り周辺で五、六カ所存在し、規模はそれぞれ異なるが、大きなものになると三階建てで数十の書店を擁するほどの規模となる。建物内の一室を店舗とする形となるため、売場面積も比較的小規模なものが多い。

この売場面積の狭さは当然書籍の陳列方法にも影響を与えることになる。特に小規模な古書店では、書籍を天井まで届く書架に所狭しと並べたり、人の背の高さくらいまで平積みしたりして、売り場内部やガラス張りのショーケースを文字どおり「本の壁」としてしまふ。こうした陳列方法は本を探す際にはなかなか苦勞を要するが、反面「本好き」にとってはずらりと並んだ書籍の背表紙を眺めているだけでも楽しいものであり、そうして目当ての書籍に行き着いたときの喜びは言葉ではなかなか表現しにくいものである。無論店主は自分の店の在庫状況を知悉しているので、目当ての本のタイトルを告げると、在庫があればほんの一瞬で取り出してくる。まさに「職人芸」ともいえるべき技である。

古書店は通常、人文系や理科系といった得意分野をおおまかに持つており、このあたりも神田の古書店などと通じるところがある。このため、筆者のような歴史研究者は自然と歴史学を含む人文系書籍を多く扱う店へと足しげく通うようになる。ただ、目的もなくふらりと入った古書店で以前から探していた入手困難な書籍に巡り合うという経験もある。このように、一見関係のない書店も等閑視はできないのは、書籍の探索を経験した人間なら古今東西共通して

経験するところであろう。そのため、筆者はテヘラン滞在中週に二、三度は書店街を回ることを日課としていた。

なお、他の西アジアの国々などと同じように、テヘランの古書店も大部分は朝九時ごろから営業を開始し、昼過ぎになると一旦昼休みで閉店して、夕方以降再度開店するという形を取るが多い。また、イスラム圏で休日となる金曜日に加え、前日木曜の午後も閉店していることが多い（これは、古書店に限らず他の商店や官公庁なども同様である）。このため、昼食をとってからゆつくり本探し、などと考えて来訪すると思わぬ空振りや喫することがあるので注意を要する。

●古書購入あれこれ

古書の購入について特徴的な点をいくつか挙げておこう。

古書店の店主となじみになると、欲しい本のリストをあらかじめ渡しておいて、その探索を依頼する、というようなこともできるようになる。後にも触れるが、筆者のように歴史学を専攻する人間は一般書店ではなかなか手に入りづらい書籍を入手する必要に迫られるこ

とが多い。そうした場合にはこのような方法で、店主の持つネットワークを利用して古書店市場での探索を行ってもらうことになる。この方法はまた、短期出張で処理すべき案件が多い場合などには時間の節約にもなる。

古書の価格が仕入れ値や出版年、入手難易度などに基づき、店主の裁量で決定されるのは、イランに限らず日本を含めた他の国々の古書店と変わらない。特にイランの場合には高いインフレ率に加え、最近まで出版への政府補助金支給などにより政府関連機関の出版物をはじめとして書籍の価格が低廉に抑えられてきたため、書籍につけられている定価は（それほど古い書籍でなくとも）価格が適正かどうか見極める参考にはならない場合が多い。このあたりは客側も経験がものをいうところであり、古書価格の相場も長期間滞在すると大体の見当がつくようになる。大部分の古書店は良心的な価格設定を行っており、個人的な経験からいえば値引き交渉が必要とされる状況に陥ることはほとんどないといってよいが、なかには入手困難な書籍に法外な価格をつける古書店もあるとのことであり、そう



人文系の古書を扱う古書店「ファールハング・ジャハーンパフシ」外観。ガラス張りのショーケースにも書籍が陳列され、ディスプレイされている。

した店に目当ての書籍がある場合には、ペルシア語能力を縦横に駆使した粘り強い交渉が必要とされることになる。

研究者のように大量の書籍を一度に購入する必要がある人種にとって、購入した書籍を日本に送ることは本を購入すること以上に頭の痛い問題である。費用面では、通常書籍を輸送する際には購入金額と同程度、またはそれより少し多めの金額が必要となり、これが結構な出費となる。また、発送は通常、郵便局から国際郵便という形になるが、小規模な郵便局では局員が不慣れなこともあって応じてくれない場合もあり、大型局ま

でタクシーをチャーターして書籍を運搬しなければならない事態も生じる。さらに、発送に成功したことが書籍の日本への安全な到着を必ずしも意味するわけではない。輸送中の手荒な扱いや内容物検査などによって梱包が破壊されることも往々にしてあるからである。

このような場合、多少費用はかさむものの専門の業者を利用する方法がある。筆者自身も二〇一一年一月にテヘランを引き払って帰国する際、五〇〇冊近い購入図書を送る際、五〇〇冊近い購入図書の発送を知り合いの書籍取り扱い業者に依頼したところ、全く無傷の状態で書籍を受け取ることができた。その手続きがいかに行われ

たのか、その詳細は今では知るよしもないが、そこには業務を請け負う人々の個人的才覚やコネクションが発揮されているようである。このように、書籍を安全に輸送する公式の手段が整備されていない一方、個人的な「つて」の有用性を再認識させられるというのは、イラン社会の特徴を表しているように興味深い。

●研究者と古書店

研究者が古書とどう関わっているか、ここでは筆者のような歴史学者を例に述べてみよう。ちなみに、筆者が専門とする近代イラン史研究の分野では、入手が必要となる書籍は大きく分けて①研究書と②史料の二つに分けることができる。①研究書は、公的文書の集成、新聞など定期刊行物の縮刷版、旅行記・回想録などのジャンルが含まれる。

まず全般的にいえることとして、イランでは歴史学に関連する前掲のような書籍は一部を除いて出版部数が多くなく、また特に中小の出版社から出版されたものについては再版されることもそれほどないため、極端な場合には出版後数年の書籍が一般書店ではみつから

なくなり、出版社に直接出向いても在庫なし、となる場合が少なくない。このため、特に古い書籍を対象とする場合でなくとも、書籍収集に際しては一般書店と並行して古書店にも出向いて探索する必要がある。また、一九七九年のイラン・イスラム革命以前に出版されていた書籍は、出版社自体の消滅や出版主体となっていた政府機関の改組などによって入手がさらに困難になっている場合もある。こうした本の入手には古書店を利用するしかない。

研究上の重要性からいえば、①の研究書については、革命以前のパフラヴィー朝下、欧米諸国との関係が比較的良好であった時期に、政治・外交史などの分野で現地語史料に加えて欧米の公文書史料なども参照した優れた研究が著されたが、これらの業績は一部の著名な歴史家によるものを除けば再版されていない。また、②のうち文書類の集成には革命以前に出版された良質なものがあがるが、こちらも大部分が一般書店では入手困難となっている。このような書籍は古書店に赴けば店頭でみつかることのできる場合も多いのであるが、その古書店だけでは対応が困難な

書籍については、前述したように古書店店主に依頼してそのネットワークを伝って古本市場から探索することになる。この方法を利用することで、よほど「レア」なものでない限りは入手することが可能となる。

なお、イスラム革命前後の混乱期には国外に脱出する人々の放出した書籍が大量に市場に流れた。当時イランに滞在していた日本人イラン研究者のなかには、現在では入手不可能となったものも多いそうした書籍を比較的安価で大量に入手した方々もおられるのとこととであり、そうして購入された書籍の一部は日本の大学・研究機関の図書館のペルシア語蔵書の一部を形成している。ただ、無論これは動乱期ゆえの特殊事例といえよう。

最後にひとつ付け加えておくと、古書に限らずイラン国内で流通している書籍は基本的に国内で出版されたペルシア語書籍であり、国外で出版された外国語書籍は英文書籍であっても購入は容易ではない。ここには、経済制裁の影響からクレジットカードなどの国際決済手段が一般的に利用できず、また国外からの書籍の安全な輸送が保証されていないといった状況が

関連している。このためアマゾンなどのインターネット上の国際書籍販売サービスも利用できない。外国語書籍を入手するには外国人滞在客の多いホテルの書店に行くか、年一回開催される国際ブックフェアを利用するしかないが、前者は品揃えの点で、後者はタイミングの点でそれぞれ制約がある。このため、長期滞在する研究者は必要な文献を国外から持ち込まざるを得なくなるのであるが、この問題は少しでも荷物を減らしたい身には大きな厄介のタネとなる。この点、近年の電子書籍の台頭は研究者にとって非常にありがたいところである。

●インターネットにおける古書取り扱いの現状

最後に、古本屋にかかわる近年の動向として、インターネットの普及の影響について簡単に触れておきたい。世界で第四のブロガー人口を有するともいわれるイランではインターネットによる商品購入も一般的となりつつあるが、古本もその例に漏れない。先述のとおりアマゾンなどの国外のサービスは種々の問題から利用できないのだが、国内向けに個々の業者な

り個人が運営主体となって古本を扱うサイトは多く、特に後者にはブログの利用も目立つ。

また、注目すべきはネットオークションのような形式で売り手と買い手を直接結びつける場を提供するウェブサイトがみられることであろう。その一例といえるのが「古本センター Markaze Ketabe Daste Dovvom」(<http://www.shbook.ir>)である。同サイトの記述によれば、ここでは「あなたがもう必要としない本を仲介なしに希望する価格で販売に供すること」「自分が必要とする本を仲介なしに適正な価格で購入すること」の二つが可能になるとされる。こうしたサイトの誕生がインターネットの普及という技術上の進展によつて可能となったことはもちろんであるが、一方で、その存立には書籍を購入して消費する比較的大きな規模の人々の存在が前提となっていることもまた事実である。

ここには、イランにおける書籍需要の大きさとその基礎となる教育水準の高さがみて取れるであろう。なお、古本に限らず新刊書を扱うイランのネット書店全般にいえることであるが、書籍購入の決済は基本的に銀行振り込みなどイラ

ン国内でのものに限られている。こうした状況は、先に述べたように経済制裁の影響から国際決済や書籍輸送の手段が確立されてこなかったことに起因している。このため、現況では日本に住む我々がこうしたサイトを利用することは不可能に近い。しかしながら、核協議の合意による経済制裁の解除により、イランとヨーロッパ諸国や中国との経済関係が急激な進展をみせている現況に鑑みれば、このような状況が改善される可能性は十分にあるといつてよい。今後の展開に大いに期待したいところである。

なお、本稿および表紙に掲載した写真は水上遼氏（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・テヘラン大学人文学部留学中）より提供を受けた。この場を借りて御礼申し上げる次第である。

（おざわ いちろう／上智大学アジア文化研究所）

《参考文献》

『一三八七年版イラン出版業案内』
《*Mariya'-e nashr-e Iran 1387*,
Tehran: Khane-ye Ketab》。